

アレクサンドル・ポノマリョフの詩「陽光降りそそぐ極圏の終わらない昼」と 南極ビエンナーレ

Alexander Ponomarev's Poem "A Sunny Polar Day That Never Ends..." and Antarctic Biennale¹

鴻野わか菜

Wakana KONO

ポノマリョフの軌跡

アレクサンドル・ポノマリョフ（1957年生）は、海や島、船、水をテーマに創作活動を続けるロシアの現代アーティストである。8年に渡って美術教育を受けたオリョール美術学校を1973年に卒業した後、海への憧れを募らせ、オデッサ工科海洋大学（現：国立オデッサ海洋アカデミー）に入学したポノマリョフは、1979年から数年間、ロシア海軍士官、商業船の航海士として「7つの海」を旅した。「当時、海を旅するには、外交官か水夫になるしかなかった」²、「海を旅したくて、バナナを輸入する商船に乗ってただ」³とポノマリョフは回想している。

1982年、健康を害して航海士を辞してからは、美術の世界に戻り、海や船の装置などを緻密に描いたドローイングを得意とする一方で、ルーヴル美術館を臨むチュイルリー公園の池にペイントされたソ連の潜水艦を出現させるプロジェクト〈狼の群れの庭〉（2006年）や、ロシア海軍の4隻の軍艦を率いて北極圏に行き、軍艦からの発煙で小さな島を視界から消し去るパフォーマンス〈マヤ、失われた島〉（2000年）など、大規模なプロジェクトを実現してきた。

2014年、モロッコのマラケシュ・ビエンナーレでは、2011年に起きたイタリアの豪華客船コスタ・コンコルディア号の座礁事故を主題に、砂漠で巨大な船のインスタレーション〈荒野の叫び〉を制作。2016年の瀬戸内国際芸術祭（秋会期）では、塩飽本島の漁師や住民への共感をこめて、3つの船から成るインスタレーション〈水の下空〉を制作するなど、人間の運命と海の関わりをテーマとするダイナミックな立体作品を、近年も次々に発表している。

彩色された潜水艦の連作プロジェクトにも端的に表れているが、ポノマリョフの創作の根底にあるのは、美術による武装解除の願いや、美術は人類という共同体にどのように働きかけるべきなのかという問いかけである。また、ロシアの研究船に同乗して北極圏で制作した映像やインスタレーション等で表現されているように、人間と自然の交感、共鳴も、ポノマリョフの創作の重要な主題となっている⁴。

ポノマリョフは、そのスケールの大きな人間性で、各国の船長や船員、美術館の学芸員、芸術祭のボランティアや地元の住民など多数の人々と交流し、自分のヴィジョンを共有すると同時に、国や民族を超えて他者の思いや歴史を体験することに意識的に努めてきた。こうした作家の創作と人生の軌跡を考えれば、ポノマリョフが、グローバルな視点から自然と人間の未来を考える集いの場である南極ビエ

¹ 本研究は JSPS 科研費 15K02404 の助成を受けた。

² アレクサンドル・ポノマリョフへの筆者のインタビュー（2013年9月21日、モスクワ）

³ アレクサンドル・ポノマリョフからの私信（2017年1月7日）

⁴ ポノマリョフの創作の軌跡については、以下の文献を参照。鴻野わか菜「海と空の間で：アレクサンドル・ポノマリョフ」『翻訳・翻案・伝承：文化接触と交流の総合研究』（石井正人編）千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第299集、2016年、37-55頁。

ンナーレを構想するようになったのも、必然的なことだったと思える。

南極ビエンナーレの概要と理念

ポノマリョフが南極ビエンナーレを2007年に構想し始めてから、ちょうど10年。2017年3月17日、ポノマリョフをコミッショナーとする第1回南極ビエンナーレの船が、世界最南端の都市ウシュアイアを出航し、12日間の航海に出る。約20名のアーティストを中心に、詩人、音楽家、自然科学と人文学の研究者、哲学者、ジャーナリストら約100名がロシアの研究船〈アカデミー会員セルゲイ・ヴァヴィロフ号〉に同乗し、南極半島に沿って南極圏を目指す⁵。航海の間、ボートで12~15カ所の陸地に上陸し、ベリングハウゼン基地（ロシア）、アルミランテ・ブラウン基地（アルゼンチン）、ヴェルナツキー基地（ウクライナ）等の南極基地も訪問しながら、作家達は皆の協力のもとに氷上に作品を設置し、その後、環境問題に配慮して作品を撤去し、航海を続ける。参加者達は船上で美術展、上映会、パフォーマンス、レクチャー、演奏会、朗読会を開催し、国籍、民族、職業、専門を越えて対話を重ねる。

南極航海の全行程、パフォーマンス等は記録され、南極から持ち帰った作品と共に各国の美術館や芸術祭で展示され、世界を巡回する。航海後の最初の展示は、第57回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2017年5月13日~11月26日）のプログラムとして、2014年にポノマリョフらがヴェネツィア・ビエンナーレ会場に設立した南極パヴィリオンで行われる。各国での展示に合わせて、レクチャーやセミナーも開催される予定である。

南極ビエンナーレの支柱となる理念は、"Supranationality"（超国家性、国際性）、"Interdisciplinarity"（学際性、諸学提携）、"Intercultural Exploration"（異文化間探検、異文化探求）、"Mobilis in Mobile"（「動中の動」、ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』からの引用）である。

南極ビエンナーレの理念である超国家性や学際性について、ポノマリョフは次のように語っている。

ビエンナーレのチームは、国際的なものにします。それは重要なことです。ビエンナーレのメンバーの中心にいるのは、アーティストです。そして彼らの周りには、私は「ヴィジョンを持つ人々(визионер / visioner)」と呼んでいます。誰もが単なる乗客ではなく、船上で、研究室で、色々な活動に参加します。そして船自体が、対話のための動く場となります。もっとも大事なものは、誰のものでもない領域を開発するという課題にとりくむ共同体を創造することです⁶。

南極ビエンナーレで学際性を重視するのは、人類共通の問題を解決する新しい原理を求めらるにあたって、多様な方法論が会う場を設けるためです。そして、それらの中心にいるのが芸術家な

⁵ 2017年2月19日現在、アレクサンドル・ポノマリョフの他、五十嵐靖晃（1978年生、千葉県出身）、長谷川翔（1987年生、群馬県出身、ドイツ在住）、トマス・サラセーノ（Tomás Saraceno 1973年生、アルゼンチン出身）、パウル・ロセロ・コントレラス（Paul Rosero Contreras 1982年生、エクアドル出身）、ジュリアナ・セヒケーラ・レイテ（Juliana Cerqueira Leite 1981年生、ブラジル出身、ニューヨーク在住）、ジュリアン・チャリア（Julian Charrière 1987年生、スイス出身）、張恩利（Zhang Enli 1965年生、中華人民共和国出身）、ユリウス・フォン・ビスマルク（Julius von Bismarck 1983年生、ドイツ出身）、ララ・ファヴァレット（Lara Favaretto 1973年生、イタリア出身）、グスタフ・ドゥシング（Gustav Dusing 1984年生、ドイツ出身）、らがアーティストとして参加予定である。研究者枠（Interdisciplinary participants）としては、筆者の他に7名前後が、ロシア、オーストリア、フランス、インド、スウェーデン、イタリアから参加する。

⁶ "Наша биеннале — экспедиция" Художник Александр Пономарев о придуманной им выставке-лаборатории в антарктических льдах // Коммерсантъ. Вторник 16 августа 2016. No.148. <http://kommersant.ru/doc/3064337> (2017年2月19日確認)

のです。芸術家は世界の全体像を俯瞰することができるからです⁷。

南極への航海は南極ビエンナーレの中心的な出来事ですが、より重要なのは、地球温暖化、海洋資源の研究、南極や宇宙など人類共通の問題について世界の人々が共に考えるための場を作り、国をこえて対話を続けるための機構を作りあげ、それを動かし続けることです。私達はヴェネツィア・ビエンナーレ会場に、初めての国際的なパヴィリオンである南極パヴィリオンを作り、すでに何度か展示を行ってきました。そして南極ビエンナーレを実現するために、これまで世界のあちこちに出かけ、様々な機関や人々との協力の輪を広げ、機構を作ってきました。その意味で、南極ビエンナーレはもうずっと前から始まっているのです⁸。

上記の発言の通り、南極ビエンナーレは、まさに対話の継続を重視する「プロセスのビエンナーレ」、「進行中のビエンナーレ」である。それは、国ごとのパヴィリオンが競い合うヴェネツィア・ビエンナーレ等とはまったく異なる、新しい国際ビエンナーレの形である。ポノマリョフは南極ビエンナーレを、従来の常識を覆すという意味をこめて（さらには、南半球に立つと北半球からは逆さまに見えるというユーモアもこめて）「逆さまのビエンナーレ」、「逆立ちのビエンナーレ」と呼んでいる。

だがいったい、なぜ南極なのか？ 南極は、ビエンナーレの実際の舞台であると同時に、国際性や学際性といった南極ビエンナーレの理念を体現する象徴的な空間だといえる。南極は、「1959年に結ばれた南極条約により、どの国にも属していない場所、人類全体の関心に基づく創造のためにふさわしい場所」であり、「人類が共有する空間や領域を開発するにあたって、将来、新しいタイプの主権を創造するためのモデルになり得る」⁹空間だとポノマリョフは語る。

それと同時にポノマリョフは、南極は時間と空間を越えた場所であり、神秘の場所であるという詩的なヴィジョンも繰り返しかえし口にしていく。

南極はすべての子午線が集まる場所であり、そこには時間がありません。南極を航海することは、日常の時間から離れて今を生きるという体験を私達に強いるのです。南極の航海は、時間と空間の境界を越えて複数の次元を同時に生きることです¹⁰。

私達が体験できるもっとも素晴らしいものは、神秘の感覚です。それは、あらゆる真の芸術や科学の源泉です。（……）この世界には、神秘の感覚が息づいていて旅人を前進に誘う場所というのは、そう多くはありません¹¹。

このようなポノマリョフの哲学的、芸術的なヴィジョン、そして、芸術家を中心とする国際的な機構を育むという彼の思想に多くの人々が賛同し、第1回南極ビエンナーレが実現することになった背景に

⁷ 鴻野わか菜「南極ビエンナーレコミッショナーに聞く」『美術手帖』2017年1月号、186-187頁。及びそのためのインタビュー（2016年10月17日、新宿）資料より。

⁸ 同上。

⁹ 2016年、ニューヨークにおける南極ビエンナーレ・プレゼンテーション資料より。

¹⁰ 鴻野わか菜「南極ビエンナーレコミッショナーに聞く」、及びそのためのインタビュー資料より。

¹¹ 2016年、ニューヨークにおける南極ビエンナーレ・プレゼンテーション資料より。

は、世界的な閉塞感の中で、詩的なものや芸術の力に希望を託そうとする新しい動きを見て取れるのではないか。

2016年から2017年にかけて各国で配布された南極ビエンナーレのプレゼンテーション資料の冒頭には、「あなた方を私の船に招待する。芸術の新しい岸辺を目指して冒険に出よう！」というポノマリョフの言葉が記されていた。共に「船」に乗り、新しい地平と未来を目指そうと呼びかける南極ビエンナーレは、私達が皆、宇宙船地球号の乗組員であり、同志であることを想起させてくれる。

〈陽光降りそそぐ極圏の終わらない昼〉

詩人でもあるポノマリョフは、自分の作品やプロジェクトに寄せて、しばしば解説文のかわりに詩を発表してきた。南極ビエンナーレのマニフェストもまさに一篇の詩として書かれており、2014年の第14回ヴェネツィア建築ビエンナーレで南極パヴィリオンを会場として開催された〈Antarctopia〉展のカタログにも掲載され、第1回南極ビエンナーレ直前の2017年2月のモスクワ、プーシキン美術館でのプレゼンテーションでもポノマリョフ自身によって朗読された。それが、以下に全文を翻訳した詩「陽光降りそそぐ極圏の終わらない昼……」である¹²。

この詩では、前半では南極ビエンナーレの構想が、後半では主にヴェネツィア・ビエンナーレにおける南極パヴィリオンの設力が詠われている。

詩の中のいくつかのイメージは、先述の南極パヴィリオンでの〈Antarctopia〉展の出展作に由来していると思われる。たとえば、「極地の基地は 雪の結晶のように雪上に降ってきた。／その中は暖かく 光に満ち／花々が 咲いている」という一節は、明らかに、ロシアの建築家アレクセイ・コズィリ（1967年生）とイリヤ・ババク（1975年生）の作品〈南極の温室 ホッキョクヒナゲシ〉を指している。コズィリとババクは、極地の植物を栽培し研究する温室を南極に設置することを夢想し、そこは南極で暮らす人々の憩いの場となると考え、美しい建築プランを作成したのである。その温室は上空から見ると雪の結晶の形をしており、エネルギー供給のための風力発電の装置に囲まれている。

一方で、「空中浮揚の法則が 解き明かされ／家々は 空飛ぶ円盤のように／大陸の 様々な町を／行き交っている」という一節は、ウィーンのデザイン事務所であるVMA（Veech Media Architecture）が出展したプロジェクト〈天国再考〉を念頭においているのではないか。VMAは、宇宙船型の住居が宇宙太陽光発電によって空を飛び回る近未来を表現したのである。

この詩では、南極ビエンナーレの内容と理念が、多面的に表現されている。

「チームは岸辺に上陸し／作家達は 雪上 氷上 水中で／ユニークな作品を実現させるだろう」、「私達の船は／作品の創造と移送のための 研究室となる。／創造 コミュニケーション 対話のいくつものセンターは／冰山 岬 島々を迂回し／幻想的な風景によって 芸術家のまなざしを刺激しながら／航海を続けていく」、「私達は南極の白い体に 擦り傷一つ残すまい。／ノウアウフィア——人間の思考の圏域——を少し拡張し／私達がそこにいたことを書きとめ 記録し／オブジェとインスタレーションを展示する」といった節は、南極ビエンナーレの航海の内容、活動の具体的な説明になっている。

¹² 訳出にあたり、以下の文献掲載のロシア語テキストを用いた。なお、英露併記の当カタログは、南極パヴィリオンの公式サイトからダウンロードが可能である。Antarctic Pavilion. Antarctopia. Padova: PAPERGRAF.IT.S.R.L. 2014. P.8-9. <http://www.antarcticpavilion.com/antarctopia-catalogue.html> (2017年2月19日確認)

「多様な人々が多様な言語で話している。／でもそこに国民はいない。／主な住民は／学者と芸術家だけ」、「芸術家 詩人 建築家 研究者の一团が／パーソナルスペースを狭めて 寄り添いあう」という表現は、ビエンナーレの理念である超国家性、国際性、学際性についての宣言である。

詩全体を通じて南極とヴェネツィアが対比されているが、それが（たんに、ポノマリョフの関わった2つの大きなプロジェクトの場所を示しているというわけではなく）南極が地球の他の地域と密接に関わっていることを示しているのは言うまでもない。両地域の結びつきを示唆することによって、南極を通じて世界全体の未来を考えていくという理念が表明されているのである。

「我々は学んだのだ——／地球の磁場のエネルギーを、／大洋の熱機関のエネルギーを使う方法を」という一節は、環境問題やエネルギーなどの人類共通の問題を考えるための機構を作ろうとする南極ビエンナーレの目的を示している。

国境を越えて多様な人々が集い、氷山の間で「空間の受難者」として運命を共にしつつ友情を結ぶこと。「人間は 動物、魚、鳥達と共に生きて」いて、「生きる権利は皆同じ」であるという共生の思想——。このように南極ビエンナーレのマニフェストが、イメージ豊かな詩の言葉、詩という形式で書かれていることは、きわめて重要である。詩や芸術は俯瞰的なヴィジョンを作り出して人々を結びつけ、科学をも先導するという南極ビエンナーレの理念が、この詩の個々の内容だけでなく、詩という形式の選択そのものにも現れているからである。

アレクサンドル・ポノマリョフ 「陽光降りそそぐ極圏の終わらない昼……」

1

陽光降りそそぐ 極圏の終わらない昼
澄み渡る 凍った空気
白い雪
氷上に広がる町は
大きな触手となり 深みへと消えていく

極地の基地は 雪の結晶のように雪上に降ってきた。
その中は暖かく 光に満ち
花々が咲いている

住居はクリスタルのように広がり
空気の中できらめいている。
空中浮揚の法則が 解き明かされ
家々は 空飛ぶ円盤のように
大陸の 様々な町を
行き交っている。

人間は 動物、魚、鳥達と共に生きている。
生きる権利は 皆同じ。

水は存分にあり
炭化水素はない。
我々は学んだのだ——
地球の磁場のエネルギーを、
大洋の熱機関のエネルギーを使う方法を。
それは 無限で
清らかだ。

多様な人々が多様な言語で話している。
でもそこに国民はいない。
主な住民は
学者と芸術家だけ。

大陸の白い旗に
刻まれている——
たった一言、
「創造」と。

そう ユートピアだ。
正確には ANTARKTOPIA——南極ユートピアだ。
でも ユートピアを思い描き 造り上げ
そしてそこで暮らすのが
私の仕事である。

2

南極でのビエンナーレは
充分 実現可能なプロジェクトだ。
私が考えるに、
それは 航海であり 動きであり
文化的冒険である。
私はすでに何度か
この航路を旅してきた。
私は 自分が味わった感覚を
人々と分かち合いたいのだ。
そして皆を知り合わせ

友情を結ばせたい――

ちょうど私達が記念日の食卓を
囲む時のように。

芸術家 詩人 建築家 研究者の一団が
パーソナルスペースを狭めて 寄り添いあう。

今ここは 研究船の甲板だ。

私達は共に ドレーク海峡の波に揺られ
海の生活の困難と闘い

どんな支えも持たずに 等角航路を南進し
突然 冰山と氷山のあいだに消えるだろう。

さあ、空間の受難者として参加しよう。

重要な仕事を 置き去りにして

旗のように 風にひらめこう

言葉と意味を 紙の上に振り落とそう

パンくずを テーブルから落とすように。

一艘の船のブリッジに 集うのは

制御できない感情と歓喜に開かれた 多才な人々。

彼らは 互いを隔てる距離と孤独に

打ち克ち

涯の向こうから 自分自身と自分の感情を眺める。

私達の船は 湾や入江に立ち寄り

風から 逃れようとするだろう。

チームは岸辺に上陸し

作家達は 雪上 氷上 水中で

ユニークな作品を実現させるだろう。

私達は 南極の白い体に 擦り傷一つ残すまい。

ノウアウフィア――人間の思考の圏域――を少し拡張し

私達がそこにいたことを 書きとめ 記録し

オブジェとインスタレーションを展示する。

その後 船は移動するだろう。

そして新たな船が 新しい場所に出現するだろう。

私達の船は

作品の創造と移送のための 研究室となる。

創造 コミュニケーション 対話のいくつものセンターは

氷山 岬 島々を迂回し
幻想的な風景によって 芸術家のまなざしを刺激しながら
航海を続けていく。

反転するビエンナーレ。
逆立ちのビエンナーレ。
動中の動。

3

南極とヴェネツィアは 血の膠で結ばれている。
もし南極が溶ければ ヴェネツィアは沈む。
きっと だからこそ それらはあんなにも似ているのだ。
南極にも ヴェネツィアにも 岸辺の入り組んだ線と
多くの島々と 目を楽しませる光景がある。
そしてもちろん たとえば
マルチェッロ・パラッツォのバルコニーから眺めたなら
港から出航し
マラモッコ水路へと漂っていく 水平線に浮かぶ何艘もの大型船は
清らかな氷山のような。
そして 乗客達のシルエットの群れは ペンギンのようだ——
とりわけ サン・マルコのそばを通りすぎる時など
喜んで 叫び立てている。
それに 誰に分かるというのだろう——ひょっとして
地軸が もう1度移動したなら
ヴェネツィアは沈まず プラトンのアトランティスのように
氷の下に 消え去るのかもしれない。
そしてあらゆる美は 未来の世代のために
保存されるのだ.....

あるいはジャルディーニだが 緑を白に変えたなら
ビエンナーレの国ごとのパヴィリオンは すべて
極地の基地となって
それぞれの国の代表となる。
だが それも夏だけのこと。
冬はあらゆるものが凍りつき 静止する。
その後 探検隊が交代する。コミッショナー、
キュレーター、画家達も.....
そして再び 研究が再開される。

しかし ビエンナーレはそもそも国々の分離を表してきた。
各国のテリトリーは分断され 競い合ってきた。
一方 南極では 1959年の南極条約に基づいて
相互関係や人生の原則が
もう長い間 ユニークな前例を作っていて
様々な国の人々が
共に生活し 創造的に働いている。

この惑星に こんな場所は他にはない！
極地では 人々の差異は
氷の自然と触れあうことで
消し去られてしまう。
まるで 氷河の側面が
風や水で 削られていくように。

ヴェネツィアの南極パヴィリオンでは
あらゆる方法論 作戦 才能が
蓄積され 提示され
文化と広大な空間が
互いに影響を与え得ることが
宣言されるだろう。

私達は可能だと考えている——
伝統あるヴェネツィア・ビエンナーレで
公式なパヴィリオンとしての地位を得て
南極大陸を表現するための形式を
共同で作り出すこと。
南極では45の国が 調和のうちに
共に生き 働いているのだから。

ベリングスハウゼンとラザレフの探検隊による
帆船ミールヌイ号とヴォストーク号の甲板で
研究者達が
南極の白い雪の大地を見た時から
そして 画家パーヴェル・ミハイロフが
岸辺の最初のスケッチを描いた時から
194年が過ぎた。あの時

あの地方で初めて 芸術が出現したのだ。

5 番目の大陸の開発が進んだ何 10 年もの間に

大量の産物が 現れたことを思えば

ユニークな

自然の風景と結びついた

新しい文化的風景の誕生について 語っても良いだろう。

私は提案する——共にその開発を 進めていくことを。